

## 肥料種類と作物栽培

肥料とは、作物の生育に必要な養分を与える目的として人間が作物に施すものである。肥料はその性質により化学肥料と有機肥料に大別される。

化学肥料とは、化学的に合成した肥料あるいは天然産出の原料を化学的または物理的な加工工程を経て作った肥料である。無機物質がほとんどである。これに対して有機肥料は動植物の排泄物と残骸などを原料として、そのままの形かまたは生物的または物理的な処理を行って作った肥料である。有機物質が主体となる。

化学肥料と有機質肥料を区別する判断基準は表 1 に示す。

表 1. 化学肥料と有機肥料の相違点

	原料	製法	成分	肥効	価格等
化学肥料	窒素ガス、りん鉱石、加里鉱石などの無機物質。	化学的合成または化学的や物理的加工を経てできたもの。	作物生育に必要な養分そのもの、含有量が高く、均質で成分が安定、ほとんどが無機物質である。	イオン化しやすく、作物に吸収されやすい。速効性	生産量が多く、安定供給が可能、養分の単位価格が安い。施用しやすい。
有機肥料	動植物の排泄物と残骸などの有機物質。	発酵などの生物的処理または蒸製、焼却などの物理的処理、或いは加工せずそのままの状態。	有機成分が多く、養分の含有量が低い。不明成分が多く、成分が不安定。有害成分や病原菌が多い。	イオン化しにくく、土の中で微生物の分解を受けてから吸収される。緩効性	供給が不安定で、養分の単位価格が高い。匂いがある。施用に手間がかかる。

但し、尿素など一部の化学肥料は有機化合物だが、これは化学合成で作られたものであるため、化学肥料に分類される。一方、草木灰は草や木を燃やした後に残った無機質の灰で、有機質ではないが、植物の残骸を原料とするもので、有機肥料とされている。

化学肥料と有機肥料の違いはざっと説明したが、それぞれのメリット・デメリットは次の通りである。

### 1. 原料、生産量と価格

化学肥料の原料は大気の 75% も占める窒素ガス及びりん鉱石、加里鉱石など鉱物で、化学合成または物理的加工で作られるため、生産効率が良く、大量生産が可能である。そのため価格も安く手軽に購入することができる。

有機肥料は動植物の排泄物や残骸を集めて作る為、原料に限りがあり、生産効率も悪く、生産量が少ない。その結果、養分の単位価格が化学肥料より高い。

## 2. 養分含有量と溶解性、肥効

化学肥料はほとんど無機物質で、内容物、養分の濃度と特性が明記され、水溶性又は可溶性のものが多い。一部の緩効性肥料を除き、ほとんどの化学肥料は施用後すぐ溶けてイオン状態になる。作物に吸収されやすいため、肥効が速く、土壤中の養分量と作物の生育に合わせて肥料施用量を調整しやすい。土壤施用以外にも養液栽培に供することができる。

有機肥料は動植物を原料とするため、養分濃度が低く、養分以外のものが多い。分解性と溶解性が低く、施用後土壤微生物にゆっくり分解され、無機化してから初めて作物に吸収利用される。従って、肥効の発現が遅いが、長く持続する。土壤改良資材として「土づくり」に適している。

## 3. 品質と環境への影響

化学肥料は純粋の無機物質が多く、原料から製造までに生産管理が行き届き、製品の均一度が高い。また、肥料登録制度があり、製品中の肥料成分と有害物質がきちんと管理・保証されている。化学肥料は人工的に合成または加工したもので、害虫と病原菌などを含まず、注意事項をきちんと守れば、保管と施用に於いて悪臭と有害ガスが発生しない。

有機肥料は原料種類、採集場所、季節、天候によりその成分が大きく変動し、特に畜産の排泄物に多量の抗生物質やホルモン類、都市ゴミに過剰の塩分や重金属が含まれて、適切な製造管理が欠ける場合は、肥料としての品質を保証しにくい。品質の悪いものは土壤生態系に悪影響を与える恐れもある。また、有機肥料は有機物質であるため、腐敗しやすく、悪臭と有害ガスが付きものである。虫や雑菌も繁殖しやすい。

## 4. 輸送、保管、施用

化学肥料は成分含有量が高く、固形を呈する場合が多く、安定して、匂いもなく、長距離輸送と保管に適する。また、粒状に加工されたものが多く、機械施用に適し、施肥効率が高い。

有機肥料は油粕や骨粉、フェザーミルなどの食品工業の副産物を除き、水分が多く、成分含有量が低く、匂いがきつく、腐敗しやすく、輸送や保管に不適である。また、機械施用に適するものが少なく、施用効率が悪い。

## 5. 土壤・環境への影響

化学肥料は、水溶性が高いため、施用不当の場合は、雨水や灌漑水に流され、地下水や河川水の硝酸塩汚染やりん酸塩汚染を引き起こすことがある。有機物がほとんど含まれていないため、長期間施用し続けると、土壤有機物が減少し、土壤物理性、化学性及び生物性に

悪影響を与える恐れがある。

有機肥料はその有機物が土壤微生物のエサとなり、微生物相を多様化させる効果がある。土壤微生物相の多様化は、微生物間の相互作用（静菌作用や拮抗作用等）の強化により根圏での微生物的緩衝能を高め、作物根の発達に好ましい土壤環境をもたらしている利点がある。「土づくり」には有機肥料が重要な役割を果たしている。

我が国によく使われる化学肥料と有機肥料の種類とその養分含有量は表 2 に示す。各肥料の成分と性質、用途、施用上の注意事項などは本 HP の「肥料施用学」の「常用肥料の成分、性質と用途」をご覧ください。

表 2. よく使われる化学肥料と有機肥料の種類と窒素、りん酸、加里の含有量

	肥料名	窒素 (%)	りん酸 (%)	加里 (%)	備 考
化 学 肥 料	硫安	20.5~21.0			
	尿素	46			
	りん酸二安 (DAP)	17~18	45~46		
	りん酸一安 (MAP)	9~11	45~47		
	重過りん酸石灰		42~44		
	過りん酸石灰		17~20		
	熔成りん肥		17~20		
	塩化加里			60	
	硫酸加里			50	
	化成肥料 (10-10-10)	10	10	10	普通化成
有 機 肥 料	化成肥料 (15-15-15)	15	15	15	高度化成
	大豆油粕	7.2	2.0	2.5	
	菜種油粕	5.8	3.1	1.5	
	魚粉	6.7~7.7	9.0~9.5	0.5	魚種により異なる
	蒸製皮革粉	12.3	0.1	0.1	
	フェザーミル	12.4			
	蒸製骨粉	4.3	21.8	0.1	
	乾燥菌体肥料	5.0~7.5	1.2~5.2	0~0.6	菌種や工程により異なる
	発酵鶏糞	2.5~4.5	2.5~4.0	1.5~3.0	乾物換算
	発酵人糞尿	6.0	9.1	0.8	乾物換算
	鶏糞堆肥	1.5	3.9	2.0	乾物換算
	豚糞堆肥	4.1	9.0	4.5	乾物換算
	牛糞殻堆肥	2.1	2.2	3.5	乾物換算

化学肥料の中には速効性を抑え、農作物の養分需要時期に合わせてゆっくり溶け出す緩効性肥料もあり、肥効調節型肥料とも呼ばれる。緩効性肥料は肥料成分の溶解・溶出、分解速度を制御することで、施肥回数と施肥量を減らし、生産コストを下げるだけでなく、肥料成分の流亡を抑えることもできるので、環境保全にも役立つ一石二鳥の効果がある。よく使われる緩効性肥料は表3に示す。

表3. よく使われる緩効性肥料

肥料名	窒素(%)	りん酸(%)	加里(%)	備考
ウレアホルム(ホルム窒素)	37~40			水田に適しない
IBDU(イソブチルアルデヒド縮合尿素)	32			
樹脂コーディング尿素	40~42			畑に適しない
硫黄被覆尿素(SCU)	34~38			水田に適しない
ケイ酸加里			20~21	

化学肥料のメリットがあまりにも顕著で、瞬く間に農家に受け入れられた。20世紀50年代からただの数10年の間で、化学肥料の生産量と使用量が急速に増加し、数千年使い続けてきた有機肥料をほぼ駆逐してきた。

作物栽培の目的は少ない労力とコストで品質の良い農産物を多量に収穫することである。その土壤特徴、作物種類と収穫部位、投入労力などに合った肥料を選ぶことは作物栽培の目的を達成するには必要不可欠である。基礎知識を身に着けて、化学肥料と有機肥料のそれぞれの特徴やメリット・デメリットを把握して、適切な肥料を選ぶことが重要である。